６　透析センター

2013年度は竜崎崇和内科部長が退職され新体制となりました。腎臓内科常勤医は3名(小林絵美医長、滝本千恵医長、宍戸崇医長)となりましたが、慶應義塾大学からの出向医(4月～7月浦井秀徳医師、8月～11月海野寛之医師、11月～3月葛西貴広医師)を迎え前年度と同様、医師4人での業務遂行となりました。看護体制は師長が専門病棟である7西病棟と兼任になり、常勤5名、臨職3名体制となりました。また臨床工学技士は新任の市川友理技師を迎え常勤4名、臨職1名体制となりました。

前年度と同じく、月水金は2クール(午前・午後)、火木土は1クール(午前)の血液透析の施行ならびに出張透析機器1台でのセンター外での急性血液、浄化療法の対応をしており、2013年度の当院での新規透析導入数は急性期導入5例、慢性期導入32例(うち腹膜透析導入1例)、透析離脱者は9例、維持透析施行のため通院透析クリニック紹介が39例、透析可能長期療養型病院への転院が5例でした。近隣透析クリニックからの入院加療依頼は34例、また持続的血液透析濾過(CHDF)施行17例、エンドトキシン吸着4例、腹水濃縮静注5例施行いたしました。透析センターでの延べ血液透析・急性血液浄化療法施行数は6058件、腹膜透析患者数は21名でした。

2013年度は従来個別に行っていた腎臓内科病棟と透析センターでのカンファレンスを合同で行うことにより病棟とセンター間での医療者の情報共有・連携を充実させ、診療の質の向上をはかりました。また従来通り定時の血液透析施行と並行して、透析センター看護師が中心となった保存期腎不全患者向けの個別教育、外来患者様への慢性腎臓病教育のためのチーム医療などを通しての保存期腎不全から末期腎不全・透析導入と至る、全ての段階の患者様の診療を可能とする体制を整えています。日本人の6人に1人が慢性腎臓病と言われている現在、より早期の段階からの医療者の介入が慢性腎臓病の進行予防につながります。また、すべての段階に対応できる医療の提示が患者様の安心には必要であり、現在の診療体制の維持および充実を考えております。

2013年度は患者･院内スタッフ向けの透析センター主催の勉強会を5回施行いたしました。医師ならびに透析センター看護師双方が演者となり､チーム医療を体現としています。

今後も当センターは今まで同様にチーム医療・地域連携の充実を図り、地域医療に貢献していく所存です。

（文責　内科医長　小林　絵美）